

拙堂會報

第15号

2023年12月1日発行

発行所
齋藤拙堂顕彰会

理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

江戸時代の教育を見直す

拙堂「詩の目標」
趣味

二松学舎 創立者

三島中洲

齋藤正和 1

加藤龍宗 2

飯田俊司 3

小川直紀 4

特別寄稿

言葉の歌から心の歌へ
— 齋藤拙堂の和歌について —

大辻隆弘 5

三芳公子 6

笑い木
令和五年度下期の行事予定

会員一覧
8 7

江戸時代の教育を見直す

顧問 齋藤 正和



明治維新によって政権を奪取した薩長連合の明治政府は徳川時代の教育を程度の低いものと決めつけ葬り去った。更に昭和の敗戦後は階級闘争史観をもった人々が、江戸時代の文化を封建制度の遺物と主張して捨て去った。

その結果、今日、「今だけ、金だけ、自分だけ」という、まことに嘆かわしい世相が支配的

になったと言える。「経済」という語は、元来、「経世済民」の略語であるにも拘わらず、「金儲け」の意味だと決めてかかり、経済優先すなわち金儲け優先の時代にしてしまったと言えよう。物質的には豊かになったかもしれないが、人々の心はまことに貧しくなったと思える。豊かな心とは何か。それは大自然や他人の心を尊重する美しい心と言えるのではないか。経済即ち金銭のためには自然を破壊し他人を蹴落として進む「我利我利者」であってはならないのだ。ところで、葬りさらされた江戸時代の文化、ことに江戸時代の教育には、心の豊かさを育む教えが沢山あった。これを見直す必要があると思うのである。

江戸時代の教育の中心は漢学であった。漢学は言うまでもなく中国文化である。中国では、科挙制度、すなわち学生のもつ漢学知識を試験する制度によって官吏を選抜してきた。しかし、日本は科挙制度を輸入しなかった。では日本で漢学はどのように機能したのか。それは今日の言葉でいうならば、選抜に関係ない「教養学科」であったといえよう。「教養」とは博学をひけらかすことを意味しない。それは、まさに「心の豊かさ」を養う方法なのだ。では、生活に直接役立つ技術はどのように教養されたか。それは徒弟制度か、乃至は専門の家塾で教えられたのである。そして、社会を指導する立場にある人々を（上級武士だけでなく有力農民、町人を含む）養成するために、実技を離れた教養科目即ち漢学が教育の中心になった。それでいて、実技教育が遅れていたかといえはそうではない。江戸時代の数学や工業技術のレベルは世界的にみても決して低くはなかった。教養科目としての漢学、とくに漢詩文を学ぶ

ことで、注目したいのは、感性を豊かにすることであろう。理性によって、この世界、宇宙を知ることの大切であることは言うまでもないが、それにもまして社会のリーダーに重要なのは、支配を受ける人々の苦勞を察する感性……それは自然の美しさを知る感性にも通じるものだが……である。

拙堂「詩の目標」

会長 加藤 龍宗



朝付く日塔世の杜にみ酒手向け

忌日に祈らむ称ふる大人を

龍宗

今日、リーダーに必要な感性を養う教養科目が、とくに高等教育で軽視されていることは寒心に堪えない。選抜試験に関係ない教養科目こそ今日のギスギスした世相を救う学問ではないか。人々の心の豊かさをとり戻すため、江戸時代の漢学教育は是非とも再評価したいものである。

七十八年目の慰霊の夏を迎えた。今夏は特に熱い日がつづいたが「芭蕉旅の全句吟詠集」筆稿に全力を注いだ。明年（二〇二四年）は芭蕉生誕三百八十年に当る、俳聖と称された芭蕉は伊賀上野の地より江戸に出て僅か二十年（三十才〜五十才）の俳諧人生であった。四十才〜四十五才の熟期に五度の旅をし、山水の遊覧により日記形態の紀行文と紀行句（一六八句）を表わしている。（小生著参照）。特に「奥の細道」は万人に愛読され、その地は観光地となり多くの人々が訪れている。

さて拙堂は儒学者であり漢詩人であったが紀行文を得意とし、多くの文話を表した、紀行文の中からおもなものを年代別に紹介しておこう。一八二四年（二十七才）始めてのものである長谷山記（義弟鈴木又甫と長谷山に登る）、一八二六年（二十九才）京華游録（京、大阪への始めの旅）一八三〇年（三十三才）梅谿遊記（梁川星巖夫妻らと月ヶ瀬へ探梅の旅）一八五六年

（五十九才）澡泉餘草（但馬の城崎温泉へ湯治の旅）一八六〇年（六十三才）南游志（紀伊半島一周の旅）等である。拙堂は深く敬仰していた韓愈（七六八〜八二四、中唐・儒者・文人）の「知者樂水。仁者樂山」又司馬遷（前一四五〜？前漢の歴史家・史記を記す）の「大自然の壯觀に触れることによって文章の大家となり得た」等に学び実践した。そして自然をこよなく愛し旅をし紀行文と紀行詩を多く記した。拙堂が十年に亘って文章の指導を仰いだ頼山陽も大分の「山国谷」を「耶馬溪」と名付け「耶馬溪図巻記」を表わし溪谷の名が全国に広がった。拙堂の「梅谿遊記」（月ヶ瀬記勝）もかくの如くである。即ち漢詩文と漢詩の旅日記である。芭蕉は俳文とても云えるか、俳意を含めた折衷の新文体の旅日記と俳句を表した、俳句と漢詩のちがいはあるが文学として共に大いに楽しませてくれる。では拙堂は漢詩についてどの様な考え方をもって居たのであろうか、次のような詩があるので紹介しておこう。

この詩は拙堂の詩に対する目標であったのか。会員の皆様のご健勝と弥栄を祈念申し上げます、よい年をお迎えてください。





理事長 飯田 俊司

趣味

詩を論ず 齋藤拙堂

平遠なる山川王孟の句
 楼臺金碧玉溪の詩
 知欲韓杜の別裁
 泰華峻嶒天外の奇

穏やかな自然詩が王維や孟浩然の詩であり

絢爛豪華に彩られた詩が

玉溪(李商隱)の詩である

おのづとそれらとは区別して

韓愈や杜甫の詩のように

泰山や華山のはるかな気高さに似た

スケールの大きい詩を作っていきたい。

年金生活も四年目に入った。現役時代には趣味は「釣り」と「読書」と言っていた。釣りは続けているものの、読書の方は少し疎遠になっている。あれほど老後は充分な暇を読書に充てられると楽しみにしていたのに。

読書との出会いは、大学時代にロシアの文豪トルストイの「復活」を読んだことに始まる。彼の平和主義、自分の良心に従って生きる考え方に共鳴、「戦争と平和」、「アンナ・カレーニナ」を貪るように読んだ。日本の作家ではトルストイに影響を受けた白樺派の有島武郎の小説が好みだった。

四十歳頃までは、読書と言えばビジネス書が

中心で小説からは遠ざかった。その後東京勤務となり、通勤電車の中で再び読書を始めた。

まず吉川英治の「新書太閤記」。史実に基づいた存在感のある主人公と物語の面白さに惹かれ、「私本太閤記」、「三國志」、「宮本武蔵」などに夢中になって駅を乗り過ごすことも度々あった。次は司馬遼太郎。司馬史観と言われる歴史観を持ち、作者が好意を持つ人物を中心に描く作品「竜馬が行く」、「坂の上の雲」、「空海の風景」、など手当たり次第に読んだ。「峠」は主人公の長岡藩士河井継之助が師と仰ぐ齋藤拙堂の茶磨山荘を訪問する場面もあった。まさかこの時は、将来拙堂会に関わることは思いもよらなかった。江藤沢周平や山本周五郎は全集まで買ったが、江戸時代を舞台に庶民や下級武士の苦衷や哀歓を描いた作品が多く、読むのに苦痛を感じることもあった。

六十歳頃からは、池波正太郎の「鬼平犯科帳」、「剣客商売」、「藤枝梅安」。主人公の活躍が痛快だった。更には葉室麟の敗者や弱者の視点を大切に時代小説。比較的短い作品が多いので、購入した文庫本は三十九冊を数えた。

読書は知識量を増やす、判断力が身に付く、語彙力が増す。想像力が増すなどの教養を高めるためと言われるが、やはりストーリーの面白いものが多い。私は特定の好きな作家の歴史・時代小説に偏った読書で、著名な作家の作品を集めた文学全集は読まなかった。

もっとも渡辺京一の「逝きし世の面影」、サミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」ジャレド・ダイアモンドの「銃・病原菌・鉄」などの文明・文化論などは興味深く読んだ。

面白いことに仕事で多忙だった時の方が読書は出来た。年齢と共に「好奇心」「向上心」それに「根気」の三つの「K」がなくなってきた。この頃はもう趣味は読書と言えなくなっていました。コロナ感染症に対する行動規制もなくなったので、今後は趣味を釣りりと元々好きだった旅行にしようかと思っている。

二松学舎 創立者

三島 中洲

理事 小川 直紀

三島中洲、名は毅。天保元年、備中窪屋郡中島村（現在の岡山県倉敷市中島）に生まれる。十一歳から学問を志し、十四歳で儒学者山田方谷の門に入り陽明学を学んだ。

二十三歳で伊勢の津に出て齋藤拙堂に師事する。

当時の津藩は二酉（にゆう・蔵書が多いこと）で天下に鳴り響き、典籍係の川北梅山は、中洲が書籍を返すたびに「もう読んだのか!」「もう

読んだのか!」と驚いたという。

津で学ぶこと五年、十五種ほどの著作も残し、「備中に三島遠叔あり」と評判にもなった。「余の学、半ば津に成る」と中洲は述懐している。

二十八歳で江戸に出て、昌平黌において佐藤一斎に学んだ。三十歳の時、備中松山藩に仕える。

明治維新後、新政府の命により上京、新治裁判所長、大審院判事（現在の最高裁判所判事）を務めた。

明治十年（一八七七）十月十日、東京一番町（東京都千代田区三番町）の自邸に漢学塾・二松学舎を創設し、時流にさからって孔孟の教えにもとづく儒学教育による人材の養成にあたった。庭に二本の松があったことから名づけられた。

当時、二松学舎は福沢諭吉の慶応義塾、中村正直の同人社とならんで三大塾といわれ、実に七千人の卒業生をだしたという。多くの子弟を育成し、漢学・東洋学の発展に尽力した。

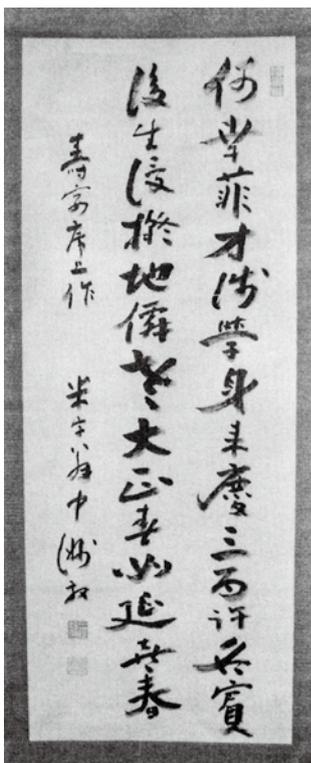
二松学舎で学んだ文化人には、夏目漱石、中江兆民、犬養毅、嘉納治五郎、黒田清輝、比田井 天来、薄田 泣菫、平塚 雷鳥……偉人がいる。

書道においては、比田井 天来

古典の筆法「俯仰法」の発見

等、書の研究に生涯を捧げ、「現代書道の父」と仰がれた書道家です。長野県に生まれ、十六歳で漢学を修め、書を独習。明治三十一年二十七歳で、二松学舎に転学して、漢籍、金石文字学、各体字学を研究する。また渡辺沙鷗、久志本梅莊、若林快雪らと親交し、書道界に知られるようになる。師、日下部鳴鶴は、自分の手本を学ぶのではなく、広く古典を

直接学ぶように指導した。第一回齋藤拙堂顕彰小中学生書道展から、企画・運営・審査されているのが、稲垣無得 理事であり、二松学舎三重県支部の前支部長で、大学の先輩、故金子清超先生門下生に推挙していただいた人生の師でもある。



（米寿の頃の作）



「教育勅語」より（八十二歳の作）

特別寄稿

言葉の歌から心の歌へ

— 齋藤拙堂の和歌について —

歌人 大辻隆弘

齋藤拙堂といえば、まずは漢文・漢詩を思い出す。斯界きっての名文家としての拙堂は名高い。が、彼は当時の知識人のたしなみとして、少数ではあるが和歌も作っていた。

彼の和歌の集めた唯一の資料として、鈴木敏雄編『津藩齋藤拙堂和歌集』（大正十四年）と言う本がある。そのなかには彼の和歌が五十首ほど収められている。ほとんどは知人や弟子たちに与えた短冊に書かれたものであるようだ。制作された時期も不明確なものが多い。

が、手掛かりはある。彼の歌の多くに詞書が付されている。その記述と彼の年譜を照らし合わせるとおおよその制作年代を推定することができるのである。その結果、文政・天保年間を中心とした彼の二十代や三十代の歌と茶磨山荘を開いたのちの五十代以降の歌の間には、かなりの印象違いがあることに気づいた。

忍岡の花を

誰も訪ふしのぶが岡のさくらばなしのび果つべきいろ香ならねば

おそらく彼が江戸に出府して間もない時期、文政十二年（一八二九年）頃の歌だと思われる。この頃、拙堂は三十代前半、彼は江戸の桜の名所である上野の忍岡を訪れたのだろう。

本来、人目を忍ぶような名前の「忍岡」であるにも関わらず、江戸に住む誰もがそこを訪れる。人目を忍ぶどころではない。初句と第二句「誰も訪ふしのぶが岡の」という部分にはそんな洒落めかした発想が窺える。さらに第四句の「しのび果つべき」はあきらかに「忍岡」という地名から引

き出されているのだろう。拙堂は目の前に咲いていたはずの満開の桜の花の美しさよりも「忍岡」という地名に興味を感じ、その地名からこのような洒落な歌を作りあげる。若い拙堂の興味は、眼前の光景よりは、地名（言葉）の方に向かっているのである。

同様のことは、同じ時期、今の東京北部にあった花の名所飛鳥山を歌った歌についても言うことができる。

飛鳥山の花を見て

きのふ来ずけふまた来ずばあすか山花の盛りをただに過ぎなむ

この歌でも拙堂は「飛鳥山」という地名に含まれている「あす」〈明日〉という言葉から発想を広げている。

私は昨日、飛鳥山に行かなかった。もし今日も飛鳥山に出かけないなら、明日には飛鳥山の花の盛りは空しく過ぎてしまふに違いない。拙堂はそう歌う。昨日、今日、明日。拙堂は飛鳥山の「あす」〈明日〉と言う言葉に触発されて「昨日」「今日」という上句の言葉を導き出していることは明らかだ。この歌でも拙堂の関心は、「飛鳥山」という地名、言葉に向かっているのである。

このような歌から感じられるのは、言葉に淫し、言葉への興味関心から和歌を構築しようとする拙堂の和歌観である。若き日の拙堂にとって和歌は、何よりもまず言葉遊びであった。言葉そのものの面白さ。その面白さへの興味関心が拙堂に歌を作らせていたのである。

が、このような言葉中心の和歌観は、晩年になってくると劇的に変化してゆく。

山荘眺望

いづくよりいづくをさして行くならむかすむ沖辺に白帆つらなる

拙堂が茶磨山荘を開いた嘉永五年（一八五二年）頃の歌だろう。この時

拙堂は五十代中盤を迎えている。

高台の山荘からは、春の伊勢湾を見渡すことができる。晩春の霞にけむる伊勢湾の海上を帆掛け船が幾艘もつらなつて荷を運んでゆく。ああ、あの白い帆はどこから来て、どこへ行くのだろう。そんなたわいもない想像が拙堂の心を過る。その瞬間をのびやかな言葉づかいで捉えたのがこの歌である。ここで拙堂は、遠くに見える白帆に心遊ばせている。彼の心は眺望に向かって解き放たれている。おだやかで自在な心のありようが想像できる素直な歌である。若い頃の歌にあった言葉遊びの形跡は全く払拭されている。おそらくは同じ頃の歌であろう。次のような歌もある。

城山は城西北郊外法見にあり

城山にのぼりて見ればおのづからころもひろくなりけるかな

今は住宅街になっている浪見町の山に登った時の歌である。そこからは津市街のひろやかな眺望が開けている。その風景の広々とした様子を見て、拙堂は「ころもひろくなりけるかな」とつぶやいてしまう。そんな情景が浮かんでくる歌だ。この歌でも拙堂は、言葉遊びを排し、眼の前の光景に触発された自分の心のありようだけを真っ直ぐに歌にしている。

このように歌を見てくると、若い頃の拙堂の歌と、晩年のそれには大きな変化があることに気づかざるを得ないだろう。若き日、言葉への興味関心が先走って歌を作っていた拙堂は、晩年、眼前の光景と心のありようをより直接的に歌うようになる。それに伴って歌の言葉はよりのびやかに、自在になっている。そんな感じがする。「言葉の歌」から「心の歌」に拙堂の歌は変わっていったのである。拙堂は漢文によって人間形成を遂げた人物である。が、晩年の和歌には彼の素直で朴訥な人間性が表れているような感じがする。

笑い木

短歌選者

三芳 公子

山に囲まれた小さな村に私は疎開していた。四歳だった。戦争が激しくなり、父は自分の故郷の母を頼って私ひとりを疎開させたのだ。村にはまだ戦火が及ばず、山にせばめられた空に時折飛行機の音がすると、子供たちは「あ、B 29や」と飛び出して見上げた。

この村には大きな寺があり、境内は子供たちの遊び場だった。四方に枝を広げた古い木が一本あった。夏になると枝々の先に桃色の花をふさふさとした。花の傘の下に子供たちは集まって日がな遊んだ。

寺の御住職のおっさまは、そんな子供たちをニコニコと見守りながら、「この木はなあ笑い木と言っんや、枝の股をくすぐってみ、花が笑っんや」と言った。男の子たちは先をあらそって木に登った、「枝がつるつるしとるで気つけて登れよ、サルでもすべるんやで」と言い残しておっさまは竹箒を持って行ってしまった。男

の子が枝の股をくすぐると花たちは、ふるふるとゆれて笑った。あきることなく何度もくすぐって笑わせた。山の村の日暮れは早い。西の空が赤く染まると鴉が甘い声で鳴き交わしながら山のねぐらへと帰って行った。

「カラスが、ああ、ああって鳴いていくね」とおしゃまな都会っ子の私が言うのと、「アホ、カラスはカアカアじゃ」と男の子たちがはやしたてた、私は遠くの父や母が恋しかった。

笑い木は秋になると花が散りはじめ、枝先に小さな青い実をたくさんつけた。もう枝に登って花を笑わせる子もいなくなり秋が深まっていた。

父や兄を兵隊にとられた子や、疎開っ子もまじる村の子供たちに教えた笑い木の話は、もしかしたらおっさまの作り話だったかもしれない。笑い木がさるすべりと知るのはずと後のことである。

さるすべりながく咲きをり

ふるさとの

かの笑い木に花満ちるむか

公子

令和五年度下期の 行事予定



齋藤拙堂顕彰

第八回「俳句・短歌」の募集に ついて

十月一日発行の
津市広報と、十月
十一日付けて事務
局から会員の皆様
にお知らせしたよ
うに第八回・齋藤



拙堂顕彰「俳句・短歌」を募集しました。

応募期限は、令和五年十月一日(日)〜令和
五年十一月三十日(木)まで。

優秀作品は令和六年三月十七日(日)の第八
回齋藤拙堂顕彰吟道大会で表彰し吟詠されます。
賞は津市長賞・津市議会議長賞・津市教育長
賞・齋藤拙堂顕彰会会長賞の四賞です。選者は、
俳句は山崎満世理事、短歌は三芳公子で、それ
ぞれ津市発行「津市民文化」の俳句・短歌欄の
選を担当しております。

俳句・短歌担当 山崎満世理事

(☎059-2255-2515)

齋藤拙堂顕彰 『第七回小中学生書道展』

令和六年三月八
日(金)から三月
十日(日)まで、津
リージョンプラザ
三階の生活文化情
報センター(展示



室)で、齋藤拙堂を顕彰する県下の小中学生書
道展を開催します。

展示時間は午前九時三十分から午後四時三十
分。最終日は午後二時。

応募要項

対象 小学生・中学生の毛筆作品

作品の大きさ 八ツ切り・縦形式のみ

課題 小一・おしろ 小二・みどり

小三・せつどう 小四・入徳門

小五・有造館 小六・拙堂文話

中学生・月瀬記勝

書体 小学生は楷書

中学生は楷書または行書

一人一点

名前の書き方 小学一、二年はひらがな

三年以上は漢字。

学年の書き方 小一〜中三、又は一年〜六年

中学生も一年〜三年のどちらでもよい。

行書作品は名前も行書

応募期間は、令和五年十二月一日(金)から
令和六年一月十四日(日)

優秀な作品には津市長賞・津市議会議長賞・津
市教育長賞・齋藤拙堂顕彰会会長賞等が贈られ、
その表彰は令和六年三月十日(日)に行われます。
書道展担当 稲垣武嗣理事

(☎059-224-3670)

齋藤拙堂顕彰第八回吟道大会

令和六年三月十七日(日)、津市吟剣詩舞道連
盟主催・津市共催・齋藤拙堂顕彰会後援の第七
回齋藤拙堂顕彰吟道大会が開催されます。

なお、当日「齋藤拙堂顕彰・俳句・短歌」の
表彰式を行い、優秀作品が吟じられます。

入場は無料。ご来場を歓迎します

日時 令和六年三月十七日(日)

午前十一時三十分から四時三十分

場所 津市大門七―十五

津センターパレス二階

中央公民館ホール

会報へのご寄稿のお願い

会員の皆様、テーマ、内容・全く自由です。
是非ご寄稿下さい。

短歌・俳句もお待ちしています。

会員一覧

令和五年
十月三十一日現在

● 団体会員 (順不同・敬称略)

- 株式会社百五総合研究所
- 伊藤印刷株式会社
- 二松学舎大学松苓会三重
県支部朋友会
- 株式会社百五銀行
- 公益社団法人日本吟道学院
水心会
- 三重交通株式会社
- 百五リース株式会社
- 公益社団法人日本詩吟学院
津岳風会
- 岡三証券株式会社津支店
- 株式会社ZTV
- 百五証券株式会社
- 株式会社刀根菓子館
- 錦水流淡翠吟詠会
- 水远流詩吟朗詠会
- 株式会社百五カード
- 藤貴流三重扇和会
- ミフジ株式会社
- 比佐豆知神社
- 社会福祉法人三鈴会くら
保育園
- 株式会社ヘルシーファミリィ
- 井村屋グループ株式会社
- 株式会社げにやH・C
- 株式会社ヘリテッジホーム
デザイン
- 株式会社辻工務店
- 三重トヨペット株式会社
- 一般財団法人三重県環境保全
事業団
- 三重県高等学校国語教育
研究会
- アルコ株式会社
- 有限会社コスモス
- おぼろタオル株式会社
- 佐藤ライト工業株式会社
- 丸ノ内ビル管理株式会社
- 株式会社中部都市建築設計
事務所
- 株式会社マルヤス
- 株式会社アイケーディ
- 株式会社アルファ
- 株式会社松阪鉄工所
- 株式会社丸中産業
- 株式会社第一ビル

● 個人会員 (順不同・敬称略)

- | | | | | | | |
|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|
| 青木 美樹 | 梅田 安春 | 北澤 浩二 | 嶋田 浩 | 田矢 修介 | 西谷 嘉修 | 松村 勝順 |
| 赤塚 聰 | 浦田 康寛 | 木下 弓子 | 下野坊順恵 | 塚澤 正 | 西村 淑子 | 水谷 忠文 |
| 赤野 多恵 | 浦出 雅人 | 紀平 奉剣 | 新開 正浩 | 柘植 信子 | 野口 浩樹 | 水谷 千春 |
| 浅田 剛夫 | 大井 和人 | 紀平 嘉信 | 菅野 克也 | 野呂 茂樹 | 見並 勤子 | 見並 勤子 |
| 東谷きみ子 | 大江多津子 | 草深久美子 | 杉浦 雅和 | 長谷 茂 | 宮下 昌幸 | 宮下 昌幸 |
| 阿部みどり | 岡 美代 | 雲井 敬 | 杉本 和 | 辻 保彦 | 長谷 茂 | 三芳 公子 |
| 荒木 康行 | (竹村観扇) | 雲井 純 | 村主 英明 | 津村 観耀 | 島山 彦和 | 三芳 公子 |
| 荒木田 豊 | 大倉邦太郎 | 栗真 恵光 | 鈴木 武史 | 寺島 栄一 | 畑野 悦哉 | 村田 修 |
| 飯田 俊司 | 小川 直紀 | 向坂 和也 | 鈴木 裕志 | 寺尾 正紀 | 林 朝子 | 森岡 三和 |
| 飯田 俊英 | 小川 真史 | 古海 玲子 | 高岡 弘典 | 寺田 観啓 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 五十嵐靖尚 | 荻原くるみ | 國分 昭男 | 高沖 芳寿 | 草深久美子 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 池田 太一 | 奥田 則子 | 児玉 進 | 高倉ふじ子 | 雲井 敬 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 伊藤 慎二 | 海住 禎人 | 小林 一成 | 高田 峰昭 | 雲井 純 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 生田 伸介 | 栢原 良 | 小林 彰 | 高山 尚 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 石野 孝廣 | 勝真 千代 | 小林 貴虎 | 高橋 正浩 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 石渡 教雄 | 葛山 丕 | 小林美智子 | 瀧川 茜 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 板谷ツヤ子 | 加藤 恒二 | 齋藤 正晃 | 竹内 雅明 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 伊藤 英次 | 加藤 栄 | 齋藤 正和 | 辰巳 清和 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 伊藤 歳恭 | 加藤 徹也 | 齋藤 正人 | 田中康一郎 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 伊藤 武治 | 加藤 龍宗 | 齋藤 佐千子 | 田中 幸子 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 稲垣 武嗣 | 金児 玲子 | 酒井 宏明 | 田中 智之 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 稲葉 邦成 | 川合 俊平 | 坂部 竜也 | 田中 秀人 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 井ノ口岳彦 | 河村ツタ子 | 佐々木政彦 | 谷 伸司 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 井ノ口輔胖 | 川上 貢司 | 佐藤 新治 | 谷口 定男 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 上島 正明 | 木崎 真陽 | 澤口 真理 | 種田 真山 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |
| 内田 観成 | 喜田 恭子 | 志田 行弘 | 種田 真山 | 村主 英明 | 林 朝子 | 森永 昌雄 |